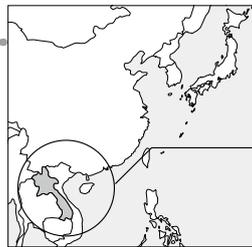


ユニセフ 子ども物語

地球に生きる子どものくらし

Lao People's Democratic Republic

ラオス人民民主共和国

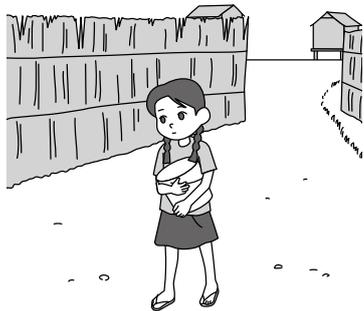


地図は参考のために掲載したもので、
国境の法的地位について何らかの立場を
示すものではありません。

先生になりたい!

ラオスの北部、中国国境に近いルアンナムター県にあるシン郡、チョム村で暮らしているラコーンちゃんは、カム族の5歳の女の子です。おばあちゃん、お父さん、お母さん、4歳はなれたお兄さん、3歳はなれたお姉さんと暮らしています。ラコーンちゃんの家は農家で、お米をつくっています。村にはおよそ60の家族が暮らしていますが、トイレのある家は10軒だけです。

ラコーンちゃんがしている家のお手伝いは、掃除と水くみです。水くみの仕事はとても大変です。洗濯や皿洗いに使う水



は、家から150m先にあるユアン川の水を使っていますが、飲み水は家から1kmはなれた水くみ場から水をくんで運ばなくてはなりません。

「もっと家の近くに、水くみ場があったらいいのになあ」とラコーンちゃん。

ラオスの小学校は6歳から始まります。そのため、5歳のラコーンちゃんは、ユニセフが支援している、地域でつくられた小学校に入学する準備のための幼稚園に通っています。幼稚園は小学校と同じ場所にあります。家から1.5km離れていますが、ラコーンちゃんは、毎日友達と楽しく通っています。ラオスには、乾季と雨季という2つの季節があります。乾季のときは、暑いのをがまんすればいいのですが、雨季のときは、雨がたくさんふって、道が川のようにになってしまうこともあります。そうすると、幼稚園へ通えなくなることもあります。それでも、ラコーンちゃんは



幼稚園が大好きです。幼稚園に行けば、友達と遊べるし、勉強もできます。「歌ったり、踊ったりすることが楽しくてたまらないの。将来の夢は先生になることなの!」とラコーンちゃん。

幼稚園で勉強しているのは、ラオス語（標準語）です。カードを使って、「アイウエオ」を勉強したり、色の名前などを覚えたりしています。カム族のラコーンちゃんは、普段はカム族の言葉しか使いません。けれども、小学校の授業はラオスの国の標準語、ラオス語で行われるので、ラオス語が分からないと授業がわからなくなってしまうのです。49もの民族がいる多民族国家のラオスでは、ラオス語が分からなくて勉強についていけなくなったため、途中で小学校をやめてしまう子どもたちがたくさんいます。

ラコーンちゃんのように、小学校に入学する前に勉強した子どもたちは、小学校での勉強の内容をちゃんと理解し、成績も良いことが分かっています。

ラコーンちゃんのように小学校に入る前にラオス語を習う子どもたちが増えれば、小学校での授業についていけるようになり、学校に通うことがますます楽しくなって卒業まで小学校に通える子どもたちが増えていくことでしょう。ユニセフは、一人でも多くの子どもたちが小学校を卒業できるように、支援をつづけています。



<文・構成：(公財) 日本ユニセフ協会>

物語の国 ラオス 人民民主共和国

ラオス人民民主共和国は、中国、ミャンマー、タイ、カンボジア、ベトナムの5カ国と国境を接する内陸国で、面積は24万km²あり、日本の本州ほどの広さです。人口は651万人。49の民族からなる多民族国家で、人口の80%が農村部に暮らしています。国際貧困ラインに満たない状況で暮らしている人も約3割おり、東南アジアの中でも厳しい状態にある国の一つです。2015年のミレニアム開発目標の達成と2020年までの後発開発途上国の脱却を国家目標としてかかげています。



©日本ユニセフ協会
民族衣装を着たチヨム村の子ども

少数民族の子どもたちの未来のために

ラオスの課題

ラオスでは、5歳未満児死亡率が、1990年には1,000人中148人でしたが、2012年には42人にまで減少するなど、大きく改善がみられ、ミレニアム開発目標4の達成も期待されています。

しかし、教育における状況は厳しいままです。初等教育純就学率は男女とも90%以上あり、高い率を示していますが、小学校に入学した生徒が最終学年まで残る割合は65%と、退学率が高いのが問題となっています。退学率が高い理由として、①就学前教育を受けている子どもたちの割合が少ない、②学校が山間部の遠隔地にあり、通学が不便である、③共通語のラオス語が理解できないため、授業が解らない。そのため、読み書きができない、といったことがあげられます。そして、その結果、中等教育進学率も低いのが現状です。

ラオスの子ども

(より詳しい統計は「世界子供白書2013」をご覧ください)

項目	ラオス	日本
5歳未満児死亡率(2011年、1000人中)	42	3
改善された飲用水源を利用する人の割合(%) (全国、2010年)	67	100
改善された衛生施設を利用する人の割合(%) (全国、2010年)	63	100
就学前教育 総就園率(%) (2008-2011年)	男22 女22	—
初等教育 純就学率(%) (2008-2011年)	男98 女95	—
小学校に入学した生徒が最終学年まで残る割合(%) (2007-2011年)	65	—
中等教育 純就学率(%) (2008-2011年)	男42 女38	男99 女100
1人あたりの国民総所得(米ドル)(2011年)	1,130	45,180
国際貧困ライン1日1.25米ドル未満で暮らす人の割合(%) (2006-2011年)	34	—

出典:「世界子供白書2013」

ユニセフは、少数民族が多く住み、貧困層の多い、南部と北部で支援活動を行っています。今回は、北部の山岳地ルアンナムター県における支援事業の一部をご紹介します。

ルアンナムター県では、人口の75%は農村部に暮らしています。ミャンマーと中国の国境に位置し、ゴム栽培や新しい高速道路の開発によって現在、急速に経済成長している地域です。

就学前教育

課題にもあるように、ラオスは初等教育における退学率が高い国です。そのため、子どもたちが小学校での授業をきちんと理解し、退学する子どもがでないように、就学前教育の支援にユニセフは力を入れています。就学前教育には以下の3つがあり、そのうちユニセフが支援をしているのは②と③で、主に先生の指導、就学前教育カリキュラムや教材の開発などを支援しています。

- ① 幼稚園: 3歳から5歳の子どもを対象としていて、都市部に設置されています。先生は幼稚園教育養成学校を卒業していることが必須です。
- ② 就学前クラス (Pre-primary): 小学校に併設されている、5歳児対象の1年間のプログラムのクラス。先生は幼稚園教育養成学校を卒業していることが必須です。
- ③ 地域による学校準備プログラム (Community-based School Readiness): 就学前クラスが近くになく、ラオス語を母国語としない、遠隔地の子どもたちのプログラム。5歳児対象の1年間のプログラムで、先生は小学校卒業

資格者で、かつ、本プログラムのためのトレーニングを受けることが必須です。教材や文具、先生になるためのトレーニングなどをユニセフが支援しています。プログラムでは、共通語のラオス語の習得を目指しています。「子ども物語」で紹介したラコンちゃんが通っている就学前教育です。



©日本ユニセフ協会/2013
地域による学校準備プログラムでの授業の様子

写真は③の地域による学校準備プログラムの授業の様子です。この先生は6日間の研修を2回受け、先生となりました。授業は、月曜から金曜の朝8時から11時まで行われています。始まった時は、生徒は11名でしたが、現在22名にまで増えました。

こうした取り組みの結果、就学前教育を受けた子どもたちは、小学校での成績も良いなどの成果が表れています。

小学校での水と衛生活動の取り組み

ユニセフは、小学校での衛生教育も支援しており、食事の前とトイレの後の手洗いを子どもたちに指導しています。子どもたちはもちろん、子どもたちが教室で学んだことを、家に持ち帰って家族に伝えることで、家族そして村の人全体に衛生教育が行きわたるという効果が期待されます。写真の小学校に設置されたトイレは、バリアフリーになっていて、村民は誰でも使えるようになっています。トイレの修繕も地域で、「School Village Development」という組織をつくり、主体的に行っています。



©日本ユニセフ協会/2013
村の誰もが使える学校のトイレ

巡回保健員と簡易保健センター (アウトリーチ・クリニック)

保健員が村を月に1回(原則)巡回する活動をユニセフは支援しています。巡回する際は、小学校の一室を借りて、簡易保健センターをつくります。乳幼児を連れた母親、妊産婦がそこを訪れて、保健教育や予防接種、妊産婦検診が行われます。母子保健向上のため、多くの妊婦に妊産婦検診を受けてもらえるよう、出産前検診1回通院につきお米10Kg、予防接種5回で蚊帳を配布するなどの取り組みを行っています。また、保健教育としては、保健員から、病院での出産のすめや妊娠時の食生活の注意などの話を聞かします。訪れた母親たちからは、「この指導に従えば家族みんなが健康でいられる」と喜びの声が聞かれました。



©日本ユニセフ協会/2013
予防接種を受ける子ども

若者向けラジオ番組「Open Hearts Open Airwaves」

テレビはまだ広く普及していないラオスでは、ラジオが多く聞かれています。ユニセフは、国営ラジオ局が行っている、若者向けラジオ放送「Open Hearts Open Airwaves」の番組制作を支援しています。毎週土曜日朝9時30分から10時まで放送しています。人気があり、聴取率は35%あります。高校生が主体となって番組制作をしていて、男の子9名、女の子5名の14名で行っています。この番組では、時期に合わせたテーマに若者の考えを発信することを目的に活動を行っており、就学前教育といったユニセフも支援している活動や様々な内容を放送しています。ユニセフは、インタビューの技術やスクリプト作成、編集などについて研修を提供しています。



©日本ユニセフ協会/2013
ラジオ放送を行う学生たち